The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜図書紹介＞『幻想のデイスクール ： ロマン派以降のドイツ文学』
Author(s)	山本, 佳樹
Citation	大阪大学言語文化学. 1994, 3, p. 178-179
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78165
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

荒木英行・木村英二・松井勲・三谷研爾・山本佳樹編『幻想のディスクール――ロマン派以降のドイツ文学』（クヴェレ会ドイツ文学研究叢書第10巻）鳥影社、1994年、480頁、2800円。ISBN4-7952-7563-7

「幻想文学」という言葉は、もうすっかり定着したというか、すでに手垢にまみれた感さえあります。しかし文学における幻想性とはなにか、と考えてみれば、これは容易な問題ではない。幽霊や妖精が登場しさえすれば幻想的かといえば必ずしもそうではない。そもそもフィクションにおいて現実と幻想の境界はどこにあるのか。

ツヴェタン・トドロフの『幻想文学――構造と機能』（1970年）は、いまなお「幻想文学」をめぐるこの種の議論にひとつの理論的基盤を提供しています。トドロフはジャンルとしての幻想文学を、現実対想像という形而上学のなかで生きることのできた十九世紀の産物であると限定し、怪奇（説明可能）と驚異（説明不可能）の狭間で読者が抱く「ためらい」こそ幻想であると定義しました。しかし彼は同書の最終章で、カフカを論じつつ二十世紀文学における幻想のありかたを示唆するとともに、「文学は、いかなる二項対立の存在をも否認するものである」という発言によって、これまでの自らのいささかスタティックな議論を（おそらくは生産的に）雑ぜ返してみせます。

この最終章でのトドロフの問題意識を、本書は引き継いでいるといえるでしょう。いわゆる幻想的なモティーフを分類したり、幻想文学と他のジャンル（たとえばメールヒェンなど）の違いを確定するのではなく、文学表現において「幻想的なもの」がどのようにして可能になるかを個々の作家と作品のなかに探ることが本書の眼目となっています。これまで幻想文学とはあまり縁がないと思われてきたような作家・作品も取り扱われており、その点ユニークといえるでしょう。「歴史のなかの幻想」「幻想の語り」「言語と幻想」「幻想の迷宮」の四つの章に、19本の論文が収められています。「幻想」というキーワードをめぐってロマン派以降のドイツ文学の流れの新たな側面がほの見えてくることを、編者のひとりとして心から期待しています。(山本佳樹[5])

[5] 言語文化部ドイツ語教育講座